

アードルフ・ボイエルの茶番劇『偽のプリマドンナ』

—または国際都市としてのウィーンについて—

長谷川 淳基

Zu A. Bäuerles Posse „Die falsche Primadonna“ — Wien als die internationale Kaiserstadt —

Junki HASEGAWA

始めに

変わった芝居があるものだ。喜劇，それも道化芝居風の茶番劇なので愉快で滑稽なことはそうなのだが，外国語が氾濫しているのである。台詞としての外国語の量もさることながら，その種類，数の多さに驚いてしまう。

時は1818年，年も押し詰まった12月，所はウィーン郊外劇場の一つレオポルトシュタット劇場。演目は『偽のプリマドンナ』。元のタイトルは『偽のカタラーニ』。事前検閲によってこのタイトルに変更させられた。例によって歌の付いたウィーン方言の喜劇であるが，この芝居の最もおもしろおかしい場面を中心にイタリア語，フランス語の台詞のやり取りが続き，その他芝居のあちこちでラテン語，イディッシュ語，チェコ語が飛び交う。

観客はウィーンに住む各層ありとあらゆる人々。個室のように仕切られたロージェでは貴族が町娘相手に火遊びに夢中，平土間では着飾った裕福な市民たち，天井桟敷では学生や仕事を終え一杯ひっかけて駆けつけてきた労働者が，何やら喧嘩をおっぱじめたりしている。どうやら芝居そのものにはさほど関心がない者も目につくなか，どうして舞台上の台詞の一言たりとも聞き漏らすまいと耳をそばだて，目を凝らしている者もある。それが演劇検閲官だったりする。

こうした観客を相手にアードルフ・ボイエルの茶番劇『偽のプリマドンナ』は大当たりをとった。

第一景 茶番劇『偽のプリマドンナ』 男が女性の歌手に化けるって?!

第一場 話しの始まり 愛し合う二人は娘の父親の猛反対に合う

幕が開くとそこはとある町，名前はクレーヴィンケル。町には市長も存在すれば軍隊もあって市として完全な形をなしているのだが，何やら全体がとてつもなく小規模で，軍隊にしても軍指令官ルンメルプフの率いる軍勢は総勢で八名である。学校にも先生と名の付く人は校長先生が一人いるだけ，従って校長先生は小使いさんも兼ねたりしている。

今しも校長先生ができの悪い生徒を叱り飛ばしている。が，カッカしているのは先生だ

け、生徒たちは先生をからかいながら教室を出ていく。校長先生の虫の居所が悪いのは生徒の出来が悪いからだけではない。娘のハンヒェンが結婚のことで自分の言いなりにならないことがどうしても面白くないのである。

丁度そこへやってきたハンヒェンに校長先生は、「金もなければ、地位もなし、将来性もない」男との結婚は許さないと申し渡し、士官候補生にして軍指令官の老ルンメルプフと結婚するよう強引に説得する。ハンヒェンが「なら、死んだほうがましだわ」と抵抗しているところへハンヒェンの恋人ルスティヒが現れる。ルスティヒは、市長ニクラス・シュタールの婚約者が、この市長との結婚を嫌がってどこかへ雲隠れしてしまったと校長先生に語って聞かせ、ハンヒェンにも同じことが起こらないよう、どうかハンヒェンと自分との結婚を許してくれるよう校長先生に懇願する。

どうしても許してくれないというなら町中に火をつける、と思い詰めるルスティヒに校長先生は「もしもお前さんがルンメルプフ士官候補生より名の挙がることをやり遂げて、それに対してルンメルプフ士官候補生が、なにせずいぶん鼻っ柱の強い男じゃが、参りましたと言うたなら、お前さんにハンヒェンをやろうじゃないか」と譲歩する。ルスティヒとハンヒェンは改めて堅い愛を誓い合うが、その場は校長先生に追い払われてしまう（三重唱『もう会えないけど、愛しい人よ』）。

第二場 どこにも居る「追っ掛け」 あの名ソプラノを聞けば、病気もたちまち直る!?

所は変わってこれもまたクレーヴィンケル市にただ一軒だけのカフェ。新聞記者のプフィッフシュピッツが「何か事件は?」と明日の新聞に載せる記事を探している。まもなくルスティヒがコーヒーを飲みに来てプフィッフシュピッツと話し始めると、町の賢人クラブ会長で詩人のシュペアリングが外国からの客人フリッツとフランツの兄弟を案内してカフェに現れる。

フランツとフリッツは「芸術鑑賞ツアー」の旅の途中で、このクレーヴィンケルへ到着する前にもヨーロッパ中で話題沸騰のソプラノ歌手カタラーニを聞いたばかりだと言う。二人は「カタラーニの追っ掛け」を自認する。新聞記者のプフィッフシュピッツが「本当なんですか。彼女が歌うと、それを聞いた人は病気が直り、阿呆も頭がよくなり、耳の聞こえないのがきこえるようになるってのは」と尋ねると、フリッツが「本当ですとも、それどころか彼女の姿を拝めば、目の見えないのが見えるようになるのです」とカタラーニの素晴しさを話して聞かせる。フリッツとフランツに付き添ってきたシュペアリングが、そんな大歌手にこのクレーヴィンケルへ来てもらうことは金輪際できないだろうと嘆くと、新聞記者のプフィッフシュピッツが新聞に招待記事を書きよう、と提案する。このやり取りを傍らで聞いていたルスティヒの頭に、恋人のハンヒェンを自分のものにするアイデアがひらめく。カタラーニのことで、何をしようというのであろう? 彼は一人になって「計画ができたぞ。やった、やった」と叫ぶ。

第三場 カタラーニ 美貌の歌姫

相思相愛の二人ルスティヒとハンヒェンはめでたく結ばれるのか、そしてこれにフリッツとフランツの兄弟のそれぞれの恋愛も絡んでいよいよ芝居は展開していくことになるのだ



A. カタラーニ

が、カタラーニについて触れておかねばならない。

カタラーニは実在したソプラノ歌手である。そしてこのカタラーニが芝居の題材に採られていることが、芝居の中での外国語の氾濫の理由の一つを成している。

アンゲリカ・カタラーニは 1780 年 5 月 10 日、アドリア海に面したイタリア中部の町セニガリアに生まれた。アンコナのすぐ北である。彼女は、この町から西南に 100 キロ程のところにあるグッビオのサンタ・ルチア修道院で音楽教育を受けた。15 才のときにベニス・フェニーチェ座でデビュー、その後フィレンツェ、ミラノ（スカラ座）、トリエステ、ローマ、ナポリで歌い、1801 年、21 才の時リスボンのオペラ座と契約しポルトガルで活躍することになる。そしてこの地で

フランス大使館員のヴァラブレック伯爵と結婚するが、その後の彼女の活動にはこの夫の考えが大きく影響している。「金銭欲に捕らわれ、軍人としても最低の男」の考えに従って、カタラーニは収入の額に最重点を置いて活動することとなったのである。巨額の報酬を要求したことについては、『偽のプリマドンナ』の中でも登場人物たちが羨望やら、不満の気持ちを込めて言及している。

結婚後のカタラーニは、まずはパリへ向かいもっぱらコンサートでのみ活躍した。1806 年、やはり彼女に強い関心を持っていたナポレオンからの契約の申し出を拒絶し、かわりに破格の条件を受けロンドンに渡った。1814 年ナポレオンが失脚するや再びパリに戻り、復活したブルボン家のルイ 18 世から 16 万フランの国庫支出金をあてがわれイタリア座の運営を任されることになった。いわゆるナポレオンの百日殿下の時期にはパリを離れていたが、その時期が経過した後は再びパリに戻り、引き続き 1817 年までイタリア座を率いる。この後、1828 年 5 月 31 日のハノーファーでの最後のコンサートまでの約 10 年、カタラーニはヨーロッパ各地を歌って回る。

1818 年 6 月、カタラーニは第一回目のウィーン公演にやってきた。歌手としてはすでに盛りが過ぎていたが、ウィーン全市は彼女のことで湧き返った。カタラーニ風のドレスが流行し、お菓子屋にはカタラーニ・ボンボンさえ並んだ。この滑稽ともいえるべきウィーンの熱狂ぶりをボイエレルは芝居に仕立てたのであった。

容姿にも恵まれていたカタラーニではあったが、身体つきはきゃしゃで小柄だった。しかし美しさは女王然とした雰囲気漂わせ、実際そうした高い身分の女性たちと同じ場に居合わせても異なるところがなかった。ヨーロッパ・ツアーに出た当時、「カタラーニ」という名前はすでに伝説的な響きを持って知られていた。彼女の芸術家としての欠点、例えば心の底から沸き上がる感情の表現で特にその欠点が目だっていたこと、モーツァルトの『フィガロ』の「伯爵夫人」でさえ充分に歌いきれないと評された等々、個々に指摘されることも少なくはなかったが、こうしたことをあげつらう批評家にしても結局はカタラーニの存在そのものに圧倒されざるを得なかった。50 才を過ぎて現役を退いた彼女は経済上の不安もな

く名声に包まれフィレンツェの邸宅に住み、1849年6月12日パリで死去した。流行し始めたばかりのコレラが原因であった。¹⁾

第四場 新しいことわざ!?「恋は発明の母」

さて彼女の伝記的事実とボイエルの芝居との関係について考えるには、もう少し舞台上の展開を追わねばならない。

校長先生の提案に対しルスティヒは「結構です、そう決めましょう。今のところ、僕に名案はありませんが、でも恋は発明の母ですから」と応じた。

あろうことか、何とルスティヒはカタラーニに化けてやろうと思いつく。ハンヒェンと結ばれるためにルスティヒがやらねばならないことは、たとえそれが騒動のようなことであっても、とにかく「名を挙げること」なのである。そしてこれにより恋のライバル、老ルンメルプフに「参った」と言わせることなのである。

もとよりこの思いつきの実行となると、ルスティヒ一人っきりで到底おぼつかない。味方についてくれそうなのは「外国人」で「カタラーニの追っ掛け」をやっているフリッツとフランツの兄弟である。ルスティヒが自分の計画を二人に打ち明けるうち、兄のフリッツはルスティヒの妹がかつてフランクフルトで活躍していた女優のマダム・グーツムート、すなわちケートヒェンに、そして弟のフランツはクレーヴィンケル市長ニクラス・シュタールの婚約者アルベルティーネに恋心を抱いていることがわかる。こうして男たち三人と、そしてハンヒェン、ケートヒェン、アルベルティーネが協力し合って、それぞれの恋の成就のためにルスティヒの奇想天外な思いつきを実行に移すことになる。

第二景 外国語の氾濫 偽のカタラーニと本当のカタラーニ

始めに述べたように、『偽のプリマドンナ』には沢山の外国語が出てくる。以下ではそれぞれにいくつかの台詞を例に引きながら個々の外国語の使われ方を確認することとしよう。

第一場 「ボンジョルノ、皆さん」 イタリア人もドイツ語を話す!?

カタラーニに扮したルスティヒの一行が現れると、市長を始めとする市民全員が熱狂的に迎え、滑稽ながらも壮大なパレードの場面が展開される。

カタラーニの宿所は校長先生の家ということになり、一行は先生の家に着く。市民をはじめ町の主だった連中や何やらが大勢カタラーニ目当てに集まってくる。カタラーニの身の世話をするお小姓に扮したケートヒェンが家の前に出てきて、連中と言葉を交わす。校長先生はじめルンメルプフやシュペアリングらには、この若者がカタラーニ自身の身の回りの世話をするにいかにもイメージ通りのお小姓と映る。第二幕第九場冒頭のシーン、お小姓に扮したケートヒェンが例のお歴々の前に登場する。

Kätschen (tritt vor, sie spricht im italienisch-deutschen Dialekt). Buon giorno, Ihr Herren!

(II, 9) ²⁾

ケートヒェン（登場すると、イタリア語交じりのドイツ語で話す）ボンジョル
ノ、皆さん。 (76 頁)³⁾

想像するに、ルスティヒは妹のケートヒェンを自分の近待に仕立て、この近待は例えばカタラーニの故郷イタリアの親戚筋の少年でもあるかのように、あるいはそうした少年が更には同時に彼女の若いツバメらしいと見なされてもルスティヒの目論見には同じく都合がよいのであるが、そうした者としてケートヒェンに役割を担わせているのであろう。

さて軍指令官ルンメルプフも何とかカタラーニに面会したいと思うのだが、ケートヒェン扮するこのお小姓に一顧だにされないことに腹をたて、「なんじゃと。わしのような英雄を侮辱するか [...] 坊主、ひざまずいて祈るがいい。お前は死ぬるのじゃ」と剣に手をかける。ケートヒェンは応じて

Kätschen. Sterben? Io non voglio morire. Rekt kommt mir dein Degen, ich habe auch eine Spada! (Zieht aus dem Stock einen Degen.) Du nun mit mir kämpfen, du mir geben Satisfazione oder du müssen morire! (Stampft mit dem Fuße) Noi vogliamo tirar di spada? Presto! Wann du sein ein Uomo di coraggio, fekten du mit mir oder ich spießen deinen Schädel wie die Kopfen von einem Stiegelitzen. (II, 9)

ケートヒェン 死ぬ? ワタシ死ヌノイヤ。お前の剣来るよい。私も剣ある。(仕込み杖の剣を抜いて) お前、私と戦う、ケットウに応じる。さもないとシヌことになる。(じだんだ踏んで) ケットウショウ、ハヤク。お前、ユウキアル男なら、私と戦う。でないとお前のどたま五色ヒワの頭みたいに串刺しよ。 (80 頁)

この場面でもうひとつ、確認しておきたいことはドイツ語が外国語として表されていることである。ケートヒェンにはイタリア語が母語であり、ドイツ語が外国語でなければならない。ルンメルプフがそう思いこまねばならないのである。そのために

- 1) ドイツ語における親称二人称 *du* で始まる動詞が不定詞のままであること (*ich* で始まる文にも見られる)
- 2) 同じくこの場合の動詞の位置が文によりまちまちであること
- 3) ドイツ語の *-ch* の発音が *-k* と発音されていること

等により、イタリア語なまりのドイツ語が表現されている。

ケートヒェンの操るイタリア語はこれに対し、少なくともルンメルプフ始めクレーヴィンケルの要人達を煙に巻くには十分に達者なものである。省かれるべき主語の人称代名詞が残されている点はケートヒェンの自然を表現すると共に(すなわちこの場面で彼女はイタリア人に成りすますために一生懸命にイタリア語をそれらしく話している)、やはり作劇法上の配慮の結果でもあろう。

総じてさすがは女優のケートヒェン、自分に割り振られた役柄を完ぺきに演じたようで、校長先生もこの場面の最初でケートヒェンのことを「ああ、こちらプリマドンナをエスコートしていらしたイタリアのお方、ちょっとドイツ語もできる変な外人さん」とお歴々に紹介している。

第二場　こわそうな軍指令官も優雅に「ボンジュール、マダム！」

シュペアリングがカタラーニを訪ねていくと、そこでは悩ましいネグリジェ姿のままカタラーニが歌の練習を始めている。カタラーニに化けたルスティヒの女装はなかなかのもの。そしてカタラーニの召使いアンリとピエールに扮しているのはフリッツとフランツ。フリッツがフランツに言う「僕らをみたら誰だってきつと、あのきざなフランスの召使いだと思っぜ」。フランスに生活の基盤を置いているカタラーニ、フランス人の召使いはいかにも自然であり、とりわけクレヴィンケルの要人たちを欺こうとしている今の状況では有効なスタッフなのである。

ルスティヒはシュペアリングにコンサートの宣伝ビラを作るよう依頼する「[...] これが私の持ち歌のリストですわ。これをもとに適当にお書きになって。宣伝ビラの末尾には私は風邪気味でとことわっておいてくださいな」。万事かしこまって、と平身低頭するシュペアリングに

Lustig (wohlgefällig). Charmant! Eh bien, baisez la main encore une fois!

(II, 12)

ルスティヒ（満足げに）　シャルマン！　エビアン、ベーゼラマン　アンコール
ユヌフォア！

(87 頁)

と流し目を送りながら手を差し出すと、シュペアリングは何とルスティヒの両手を取ってそれにキスの嵐を降り注ぐ。夢中になってキスをやめないシュペアリングに辟易しながらルスティヒは

Lustig. Nun fort, süßer Dichter! Die Zeit drängt, ich vertraue ganz auf Sie. (Ihn wegen seiner verliebten Zudringlichkeit vor den Bedienten warnend) Je vous prie, regardez les domestiques!

(II, 12)

ルスティヒ　さあ、お行きなさい、すてきな詩人さん。時間がありますわ。あなたをすっかり頼りにしてますわ。(恋に夢中の押しの一手に、召使いがいますわと注意して) ジュヴプリ、レガルデ　レドメスティク！

(87 頁)

と言って彼をやんわり追い返す。シュペアリングは夢見心地のまま帰っていくのである。

フリッツ、フランツ、そしてルスティヒが笑いころげていると、入れ替わりに軍指令官ルンメルプフがやってくる。

Lustig. Ah, der Herr Stadtkommandant! (Für sich.) Himmel, verleihe mir nur jetzt deine Hilfe!

Lummelpuff. Votre Serviteur, Madame, vergeben Sie, daß ich so geradezu hereintrete; aber ich komme aus zweisachen Gründen.

(II, 13)

ルスティヒ　まあ、指令官様！（独白）神様、いまこそお力添えを。

ルンメルプフ　ボンジュール、マダム。突然お伺いせし失礼の段お許し下さ

れ。されど本官が罷りこしたには、ふた通りのわけがありまして。(88 頁)

思わず感心してしまう。軍指令官ルンメルプフはただの阿呆ではない。場所に応じて、礼儀作法にもとることのない挨拶の要領を心得ている。

第三場 「ほんまに、旦那はんら、お願いやさかい」 ユダヤ人は大阪弁をしゃべる?!

カタラーニが校長先生の家投宿したというので、町の要人や市民が先生の家の前に押し掛けてきたとき、ユダヤ人のアーロンもやって来た。宝石の行商をしているアーロンはかつてフランクフルトで本物のカタラーニに会ったことがある。いい宝石を想买い、というその時のカタラーニの言葉通りに高価な宝石を持参してきたのであった。ところがそこに居合わせた校長先生が、こいつは偽者、こいつは皆をだますために変装してきたルスティヒだ、と叫び大騒ぎになる。結局アーロンはルスティヒに間違えられたまま連行されてしまう。

アーロンが初めて登場する場面である。

Jude. Herzleben, meine Herren, können Sie mir nicht sagen, wo da die graube Sängerin wohnt, die erst angekommen ist?

Schulmeister. Was will der Jude? (II, 5)

ユダヤ人 ほんまに、旦那はんら、お願いやさかい、大歌手が泊まってはるんはどこか教えてくれはりまへんか。着かはったばかりやということなんやけど。

先生 ユダヤ人が何用だ。(62 頁)

このシーン、なぜ校長先生はアーロンをユダヤ人と認識するのだろう。服装や身体的特徴とかの外見上の判断があつてのことかもしれない。が、今我々に確実に言えることは、アーロンの話す言葉によって即座に彼がユダヤ人だと知れるということである。話し始めるきっかけとして、そして他の場面の例では言葉を次ぐ場合にも、アーロンは頻繁に Herzleben! という言葉を発する。例えば手元のイディッシュ語辞典、双書 DUDEN TASCHENBÜCHER の Jiddisches Wörterbuch の説明によると、-leben の表現は、親しみを込めた呼びかけとしてイディッシュ語に特有のものであることがわかる。máme-leben! は liebe Mutter! の意味であるとの例が示されている。

ここは見ず知らずの人にものを尋ねる場面である。アーロンの言葉は自身のドイツ語としては可能な限り丁寧でかつ正しいドイツ語であろう。が、grouß の綴り、従ってアーロンの発音ひとつからもイディッシュ語の特徴は明らかである。アーロンのドイツ語の特徴をもう少し見てみよう。

Jude. Ich habe mit ihr gesprochen in Frankfurt, wird sein drei Monat', hab' ich schöne Staner gehabt, hab' ich wollen mit ihr was handeln; aber ist ihr gewesen meine War' zu schofel. [...]

(II, 5)

ユダヤ人 わしあの人とはフランクフルトで会って話したことあるんや。もう三月になるの。わしはきれいな宝石もってたさかいに、買って貰おう思うたんやけ

ど、あの人にはわしの品物はちいとちゃちゃやった。

(63 頁)

目につくアーロンのことばの特徴は

- 1) いわゆる枠構造が必ずしも正しく使われていない
- 2) 主語の脱落が見られる
- 3) 定動詞が多く文頭に出ている
- 4) Staner (宝石) の -er はイディッシュ語の複数形

schofel (みすばらしい) もヘブライ語に語源を持つイディッシュ語

以上のうち1) から3) については、イディッシュ語の統語論上の規則に一致すると考えてよかろう。⁴⁾

第四場 我を忘れた時、照れくさい時、お国なまりのチェコ語が出ます

要人というからには肩書きが大事。クレーヴィンケルのお歴々も同じこと。学校にたった一人先生が居れば、もちろんその人は「校長先生」、士官候補生であってもここクレーヴィンケル市では「軍指令官」。カタラーニに会いに来たシュペアリングも召使いに扮したフリッツに「ご用は何でしょう」と尋ねられると「えー、私めは詩人、作家、文士、雑文家など諸々の肩書きを持つものですが」と切り出し、ルスティヒ扮するカタラーニに名乗るときには勿論爵位とともに自己紹介する。

このシュペアリングの口からパーメン語すなわちチェコ語が飛び出すことがある。先に引用した場面、猛烈な勢いで求愛のアタックをかけてくるシュペアリングを、カタラーニことルスティヒは少したじろぎながらフランス語で「堪忍してくださいませ、召使い達が見てますわ」。続くシュペアリングの台詞である。

Sperling. Taki, taki! O Engel, o himmlisches Weib! Sobald ich Ihre Geschäfte verrichtet habe, komme ich wieder. (Wirft Lustig einen Kuß zu.) [...] (II, 12)

シュペアリング ウィーよ、ウィーよ。おお天使、おお天女、あなたのご用を済ませたら、飛んで戻ってまいります。(ルスティヒに投げキスをする) (87 頁)

もう一つの場面は芝居のラストシーン、ルスティヒの計画が効を奏して市長以下、軍指令官ルンメルプフらと共に詩人シュペアリングも退散する場面である。

Lustig (läuft ihm nach). Halt! Ich habe die Wette gewonnen, ich bitte um die alte Hausader!

Rummelpuff. Geh' Er zum Teufel! (Ab.)

Sperling (läuft beschämt nach und spricht böhmisch). Dobre noce! (II, 28)

ルスティヒ (小走りに後を追って) お待ちなさい。私が賭に勝ったんだ。その古色蒼然たる弁髪を頂きましょうか。

ルンメルプフ とっとと失せやがれ! (退場)

シュペアリング (きまり悪げに後を追って、ボヘミア語で言う) サイナラ。

(118 頁)

アードルフ・ボイエルの茶番劇『偽のプリマドンナ』または国際都市としてのウィーンについて

ウィーンの大衆劇場にあって、夜ごと観客の笑いを誘うシュペアリング、そして先のアーロン。観客はどのような気持ちで彼らを笑っていたのであろうか。これについては後ほどのテーマとしよう。

第五場 ラテン語はふだん着の言葉

シュペアリングが初めてカタラーニに会いにやってきた場面。カタラーニに扮したルスティヒが歌の練習を始めている。部屋に通されたばかりのシュペアリングは部屋の隅につつま立ったまま、ルスティヒの方もシュペアリングに気づかず歌い始め、このシーンは滑稽な掛け合い漫才になる。ルスティヒがピアノを弾きながら「はるばると我は来にけり」と歌うと、シュペアリングが小声で「ですな」とうなずく。「ああ、楽しきは旅回り」との歌に、小声で「でしょうな。どこへいっても 50 万という金をかっさらっていけるんですから」とシュペアリング。「我が愁いし顔見し人ありや」との歌に、シュペアリングは「私だって楽しそうな顔はできるさ。私の借金と彼女のお金をとっかえられたらね」。ルスティヒが「ああ、思えば幸せの日々」と歌うと、シュペアリングが「噂じゃ、ウィーンでは仮面舞踏会だけで一万七千グルデンっていうからなあ」。続く場面である。

Lustig (singt).

„Ja, wo's mir gut geht, dort bleib' ich, Und was mich g'freuen tut, das treib' ich.”

Sperling (sich vergessend). So bin ich auch. Ubi bene, ibi patria! Wo man was zu essen hat, dort ist mein Vaterland!

ルスティヒ (歌って) これよりも、よき目みる地に留まりて楽しきことのみ行わん

シュペアリング (我を忘れて) 同感！ ウービベネイー・イビパトリア 住めば都。おまんまにありつける所がわが祖国ってこと。

このラテン語が思わずシュペアリングの口をついて出たものであることは間違いないだろう。この台詞はその場に居合わせる誰かに聞かせるものとして、即ち知識のひけらかしとして発せられたものではない。またト書の「(我を忘れて)」も「同感！」というセリフだけにかかるものとする必要はない。シュペアリングにとってはふだん着の言葉である。⁵⁾

第三景 田舎町ウィーンと国際都市ウィーン

第一場 コツェブー『ドイツの小さな町の人々』 女装は無いけど同じ話?!

『偽のプリマドンナ』の話の大枠はウィーンの人々にはおなじみのものであった。アウグスト・フォン・コツェブーの四幕ものの喜劇『ドイツの田舎町の人々』Die deutschen Kleinstädter は 1802 年の初演以来、ここウィーンのホーフブルク劇場で大当たりを取っていた。この作品は、フランスの劇作家 L. B. ピカールの『フランスの小さな町』La petite ville をコツェブーがドイツ語に自由訳し、この自由訳をもとにコツェブー自身が新たに書き下ろしたものである。「度量が狭く、頑迷な俗物が住む田舎町」を描いたこの芝居に、1818 年

バイエルレはカタラーニの公演をめぐる当地での大騒動ぶりを盛り込んで『偽のプリマドンナ』を書いた。

『ドイツの田舎町の人々』も外国語がふんだんに出てくる。しかし一読して確認できるようにこちらの芝居での外国語の使われ方と、『偽のプリマドンナ』でのそれとはまったく異なる。コッツェブーの作品では外国語の種類がフランス語とラテン語に限られる。そしてこのフランス語とラテン語にしてもそれらによる会話のやり取りはなく、大半がセリフの中の個々の単語としてのみ使われる。

第一幕第九場。「クレーヴィンケル市長にして元老」のニコラウス・シュタール、その母で「二等収税吏」シュタール夫人、シュタール氏の娘のザビーネ、そして市長の弟で「教会役員会副会長」のシュタール氏が居合わせるところへ一人の農夫がやって来て、馬車がひっくり返り、旅の紳士がけがをしましたと報告し、けがをした旦那から申しつかりましたと市長に手紙を差し出す。それは首都のさる大臣から市長に宛てられた一通の推薦状で、この推薦状を携えていくオルマース氏をクレーヴィンケル市で丁重にもてなしてくれ、との依頼の手紙であった。

実はこのオルマースは市長の娘ザビーネの恋人であり、オルマースは自分とザビーネとの結婚がスムーズにまとまるよう知人である大臣の手を煩わせたのであった。ザビーネの父親である市長はそうした事情を知らずに、都の大臣からじかに自分に宛てられた書状に感激し皆にこの手紙の文面を読んで聞かせる。

BÜRGERMEISTER (liest). » und ihn als Ihren eigenen Sohn zu betrachten « - fiat! -
 » Mit Vergnügen werde ich jede Gelegenheit ergreifen, Ihnen wiederum gefällig zu sein «
 - Zuviel Gnade! - » Ich verbleibe mit Hochachtung meines Herrn Bürgermeisters dienstwilliger Graf von Hochberg. « - Alles manu propria. [...] ⁶⁾

市長（読む）「そしてこの人物をあなたの息子として遇していただきたい」——オーケー、オーケー！——「またの機会、あなたに余の感謝の気持ちを表す機会に恵まれることを確信するものです」——もったいないことでございます！——「敬具。
 市長殿。ホーホベルク伯爵 拝」——オール、ハンドライティング！——

『ドイツの田舎町の人々』での外国語の使われ方はおおむねこのようである。コッツェブーの『ドイツの田舎町の人々』とバイエルレの『偽のプリマドンナ』との間での外国語の扱われ方の違いは、もちろんストーリーの違いに関係してのことである。が、それだけが原因ではない。例えば両作品に共通して登場するシュペアリングの人物像はどうか。バイエルレの作品ではシュペアリングはチェコ出身と思われる人物に仕立てられている。

ここに見られる違いは詰まるところ北方ドイツとオーストリアの違い、または啓蒙主義の規範に対するウィーン人の生理的嫌悪という言い方もできよう。が、何ということはない、もともとはゲーテが君臨するワイマールで日の目を見るはずだった『ドイツの田舎町の人々』は当然のことながらウィーンにあってはホーフブルク劇場の演目であり、きょうの昼ひなかに町で起きた事件をその日の夜に芝居小屋で笑い飛ばす体の『偽のプリマドンナ』はレオポルトシュタット劇場の出し物であったというだけのことである。その中身、すなわち、場の

アードルフ・ボイエルの茶番劇『偽のプリマドンナ』または国際都市としてのウィーンについて

設定、ストーリー、音楽、台詞等が地域に直接結びついている芝居、すなわちローカルものの芝居『偽のプリマドンナ』が、観客の笑いを取るために多くの外国語を舞台上で飛び交わせている。ボイエルの芝居について指摘できるウィーンのローカル性、地方性とはこういう性質のものである。

第二場 フィナーレ あるいは作者ボイエルは国際人?

19世紀前半のウィーンのジャーナリズムを代表する演劇新聞の編集発行者としても名前を残しているボイエルは三月前期の時期、すなわち20年代から40年代に掛けてウィーンの第一級の名士として名を馳せた。

70作に及ぶ彼の演劇作品のうち代表作とされ、そのために現在も舞台に掛けられている作品、例えば『ウィーンの市民』*Die Bürger in Wien*、『アリーネ、あるいは別の大陸のウィーン』*Aline oder Wien in einem andern Welttheile*はその芝居の内容から見るに、「国際的」とか、首都ウィーンを代表する人物として「世間の事情に明るく、目から鼻に抜けるような伊達男」⁷⁾ または一流の「ジャーナリスト」といった形容詞や肩書きを持つ作者から連想されるイメージに決して一致するとは言えない。それどころか「オーストリア、万歳万歳」⁸⁾ 「その通り、皇帝の都はただひとつ、ウィーンはただひとつ」⁹⁾ とウィーンを歌い上げるボイエルは、逆にすんでのところ田舎町の偏狭な俗物とのそしりを受けかねない。彼はみずからの筆で『偽のプリマドンナ』を書き、そこでユダヤ人アーロンを描いたのである。マグリスの大著『オーストリア文学とハプスブルク神話』は全体の論理構成に関してまま非難も受けるが、類書の中で別格の労作である点で議論の余地はない。彼は書いている「ドイツ人のヴィリバルト・アレクシスがウィーンとその国際色豊かな住民たちの生活について機知あふれる筆致で伝えてくれるように、異質な民族の混淆やいろいろな風俗習慣の出会いのざわめきは、文学のなかに生き生きとこだましている。潑刺とした小柄なウィーン女性、脚絆をぴちっと巻き、熊の毛皮帽子をかぶったハンガリー人、ポーランドのユダヤ人にやくぎのスロヴァキア人、彼らは、群がりひしめきあうように生きている」。¹⁰⁾

ボイエルの無邪気さ、彼のアーロンの描きぶりには責められる点多かろう。しかしこの芝居が、時代を経てもなお夜ごと演じられる町ウィーンに後年それでも限りない愛着を表明した点では、ユダヤ系の作家もドイツ人作家も変わることはなかった。

このボイエルの『偽のプリマドンナ』は「国際性」にまつわる虚と実、なま身の個人が自ら対峙し、それによりあるべき関係を個々に模索成立させるべき問題としての自国と他国との関係をのびやかに歌いきっている。

注

- 1) Adolf Weißmann: *Die Primadonna*, verlegt im Jahre 1920 bei Paul Cassirer in Berlin. S. 123-129 並びに *Riemann Musik Lexikon. Personenteil A-K*, hrsg. v. W. Gurlitt, 1959 Mainz の Catalani の項目に依った。同じくカタラーニの図版は Weißmann の著作から取った。

- 2) (II, 9) は Zweiter Akt, Neunte Szene を略記。以下同じ。使用したテキストは Adolf Bäuerle: *Die falsche Primadonna (Die falsche Catalani)*. In: *Alt-Wiener Volkstheater*, hrsg. v. Dr. Otto Rommel, Sechster Band (*Adolf Bäuerle*, II. Bd.)
- 3) 本論中に引用した『偽のプリマドンナ』の訳は『ウィーンの茶番劇』(ネストロイ研究会訳, 同学社発行)に収められている翻訳を使った。(76 頁) は同書におけるページを示した。
- 4) イディッシュ語については上田和夫著「イディッシュ語文法入門」(大学書林発行)に多くを負った。
- 5) 当時のウィーンでは日常生活でもラテン語の知識が必要であったことについて、例えばグリルパルツァーも書いている「[...] 父はハンガリー人にラテン語の手紙を書く必要が生じた。そして語法について疑問を持ったので、辞書を引いて調べようと思って今まで一度も入ったことのないわたしたちの部屋にやってきた [...]」(『グリルパルツァー自伝』佐藤自郎訳 名古屋大学出版会 21 頁)
- 6) August von Kotzebue: *Die deutschen Kleinstädter*. In: August von Kotzebue: *Schauspiele*. Athenäum Verl. 1972, S. 410
- 7) *Adolf Bäuerle und das Alt-Wiener Volkstheater*. Hrsg. : Franz Patzer, Wiener Stadt- und Landesbibliothek 1984, S. 8
- 8) Adolf Bäuerle: *Aline oder Wien in einem andern Welttheil*. In: *Alt-Wiener Volkstheater*, hrsg. v. Dr. Otto Rommel, Fünfter Band (*Adolf Bäuerle*, I. Bd.) S. 90
- 9) *ibid.* S. 105
- 10) クラウディオ・マグリス『オーストリア文学とハプスブルク神話』(風の薔薇発行) 94-95 頁。